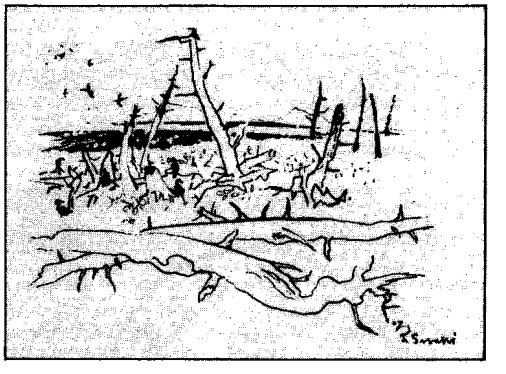
根釧原野

◉

畑 正憲



朝日新聞社

◉
根釧原野 こんせんげんや
◉
定価――――七八〇円
発行――――一九七八年三月十日　第一刷
◉
著者――――畑　正憲
発行者――――朝日新聞社　角田秀雄
印刷所――――明善印刷株式会社
発行所――――朝日新聞社 東京・大阪・名古屋・北九州
◉
© Masanori Hata 1978
◉
0095-254558-0042

根釧原野◉目次

早春 7
カラスカンザブロウ 16
鴨氷結 26
貝騒動 36
スーパーブラザーズ 46
五月病 56
笹の海 65
オヒョウ物語 73
車大吉 100
黄金道路 126

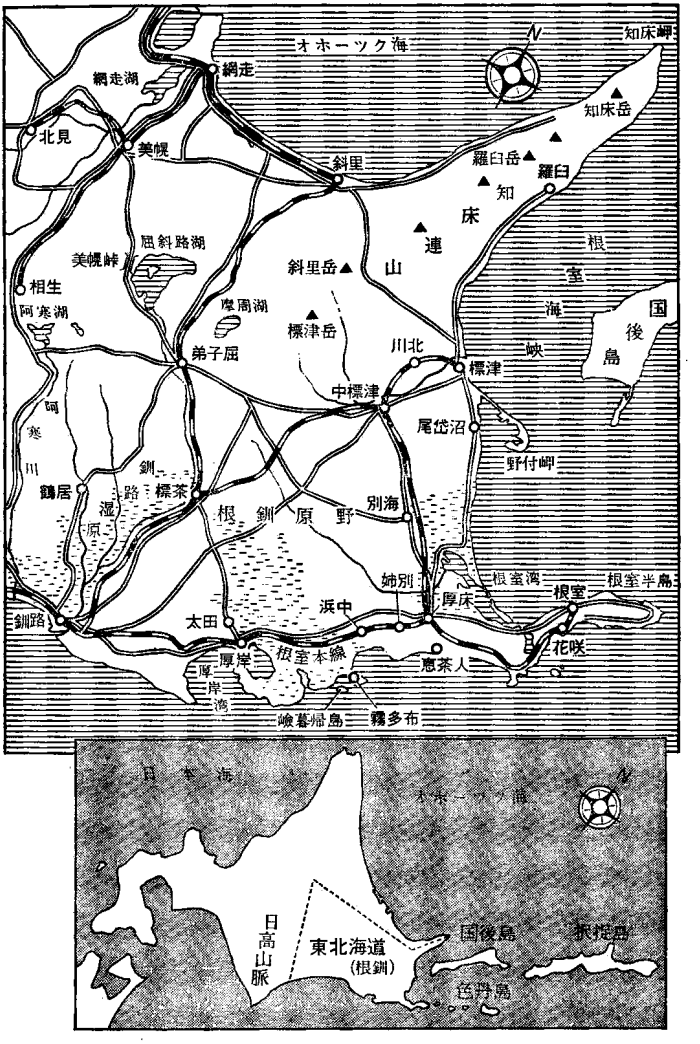
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ゆっくり走ろう 北海道 135
雪の⑧—⑧ 143
デンセンマン 152
大停電 161
鶴居物語 171
石綿君 199
毒草 209
わが原野 219
◉
後記 229

装幀——松村定育
写真——畑　三喜雄
扉絵——佐々木栄松
◉
地図——吉沢家久

根釧原野

こんせんげんや


オホーツク海
知床岬
網走
網走湖
知床岳
北見
美幌
羅臼岳
羅臼
斜里
知
床
連
山
根
室
海
峡
国
後
島
美幌峠
屈斜路湖
斜里岳
相生
阿寒湖
摩周湖
標津岳
弟子屈
川北
標津
中標津
尾岱沼
野付崎
釧
路
湿
原
鶴居
標茶
根
釧
原
野
別海
姉別
根室湾
根室
根室半島
釧路
太田
浜中
厚床
花咲
厚岸
根室本線
恵茶人
厚岸湾
嶮暮帰島
霧多布
日本海
オホーツク海
日高山脈
東北海道
(根釧)
国後島
択捉島
色丹島

早　春

ある日ふと沖を眺めたら水平線がなくなっていた。

手前には、青さを増した波があり、波の間には、まだ三つ四つ、北から旅をしてきた流れ氷が浮いている。そして波は沖へいくほど小さくなって、やがて紫がかったかすみとなって空と溶け合っていた。

空が降りてくれば春だ。冬の間中、空は星より高い所にあって、水平線は、まるで定規を当てて彫りこんだようにかっきりしていたのだから。

水平線がおぼろにかすんだ翌日、湿った雪がどっさり降った。それが一日でとけ、頑固な根雪を洗い流して褐色の地面が露(あらわ)れた。その大地はまだ凍っていて、去年の秋の、馬の足跡がくっきり残っていた。

原野に春がやってきたのだ。私には、七度目の春。

白樺林が梢で色を変えている。黒い小枝が臙脂(えんじ)になり、芽のふくらみが大きくなっている。

――さあ春だ。

私はそう思う。と同時に、一年中で最も厭な二週間がやってくるのを覚悟しなければならない。

否、最も厭だという表現は適切ではないかもしれない。私は原野の四季すべてが好きである。だが、春が近づく、この二週間だけをどうしても好きになれないのだ。だから、唯一嫌いな何日かがやってくると言った方がいいかと思う。

旅行者は同情する。

「このあたり、冬は、雪が深くて大変でしょうね」

ところが東北海道では、雪はさほど深くはない。道南や東北に比べたらものの数ではない。雪を運ぶ雲が日高山脈でストップされるせいだ。

そう説明すると、旅行者は人ごとながらほっとした調子で、

「そうですか、それじゃ住みやすいですね。雪の新潟じゃ、除雪するだけで大変ですものね。あれは闘いですよ」

「ところが――」

私は更に説明を加える必要がある。

雪がすくないのは、確かに生活を楽にしている。第一、除雪の手間が要らない。それは北国だから雪は降るけれど、道が埋まってしまうほどではない。国道や町道が通行不能になるのは、年間、一日か二日である。

でも雪がすくないので、寒さが大地にじかにしみ通る。雪は一種の大地の防寒衣であり、冬の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじめに何をどう間違えたか、ドカ雪がやってきて大地を覆ってくれると、大地が深く凍らないまま冬を越す。

初冬にドカ雪がくるのは、しかし例外であり、たいてい雪は三月にどっと降る。

寒さが最もきびしい一月の終わりから二月のはじめにかけては、雪は三十センチほど積もっているに過ぎない。だから大地が凍る。寒い年には、身のたけほど深く凍っている。

「シバレがきついでや」

農夫は顔をくもらせる。シバレがきついと、雪がとけてもなかなか大地が甦らない。表面にうっすら緑が萌え出してきても、掘ると、内部には氷の層がある。

大地のシバレがすっかりなくなり、地下水が自由に流れ始めるまで、道東ではかなり時間がかかる。

「まんだ、シバレ落ちしねえもにょな」

農夫はそう言う。

シバレ落ちしない間は、農作業が出来ない。だから春の訪れが極端に遅くなり、作物の栽培には不向きである。

稲作には向いていない。かと言って野菜を作っていたのでは、一番出回る、安い時期にしか出荷出来ない。

農作物が割に合わぬ〝不毛〟の土地は、長い間、人の増加を拒んできた。それで原野が日本にしては珍しく広い面積残ったのだが、ここのところ、国が大酪農地帯を出現させようとやっきに

なっているので、原野は年々ひらかれ、牧草地へと変わりつつある。その牧草畠でさえ、シバレがきつい年には、根腐れ病などが発生し、大きな打撃を受ける。

桜が咲くのがやっと五月の末だ。そのことからして、いかに春の訪れが遅いか、想像いただけるかと思う。

大地の深い部分にシバレが残っていて、表面だけが温められるので、道はひどいぬかるみになる。丁度コンクリートの板の上で、雪どけの水分を加え、泥をこねまわしたようなものだ。

普通の車はもちろん使いものにならない。ジープだって、ちょっと運転を間違えると泥沼にはまりこんで、当分の間放棄しておかねばならぬ。トラクターの車輪に特別な爪をつけると、歩けるには歩けるけれど、今度は道が耕したと同じ状態になって、シバレが落ちても使いものにならなくなる。

水平線が消えると、動かない方が得だ。

「くるぞ」

「またか。やれやれ」

私たちは、春ごもりの準備をする。買い物に行く。暖房の灯油を仕入れる。便所の汲み取りにきて貰う。

買い物の帰り、坂を登っていたら、大きな羽音をたてて丹頂鶴が目の前に舞い降りた。

餌付けされているので、冬の間、道東の鶴のほとんどは、釧路に集まってしまう。

雪の畠に群れている鶴の写真を見た人は多いと思うが、これはすべて、餌付けされたものである。最近は鶴の数よりカメラマンの方が多くて、見に行くと、いやはやなかなかの眺めである。鶴が何か変わった動作をしようものなら、

——バシバシ、パシャパシャ。

まとめると時価数百万円になろうかという高級機が、いっせいにシャッター音を響かせる。

その鶴たちも、三月も半ばを過ぎると、そろそろ氷がとけ始めた湖や沼に還ってくる。そして天然の餌を拾い、野生の生活を始めるのである。

巣をつくり、雛を育てるのだが、その前にナワバリを決めるひと騒動がある。一つの沼に四羽とか五羽の群れが見られ、追ったり追われたりして、つがいが住みつくようになる。

追われたものが、とんでもない所に舞い降りるのはシバレ落ちの頃だ。

忘れもしない、この原野に居を定めた時、つがいの鶴が庭に舞い降りた。書斎を建て、最初に徹夜をした日の朝、やはりつがいが、屋根をかすめて飛び、玄関にちょんと立ったのにも驚かせられた。私はその美しさにしびれたものだ。

買い物の帰りに、車の前に降りた鶴は一羽だった。まだ若いのだろう、ものおじせず、車の前をひょいひょい脚で跳び先導してくれた。

——春だな。

私はまた胸の中でそう繰り返す。そして、いい所に住んだとつくづく思う。丹頂鶴に先導されて家に帰るなどという芸当は、日本の他の部分では不可能だろうから。

その夜、わが家の食卓は、一種の狂躁状態を呈した。

順を追って記そう。

まず、浜を覆っていた氷が沖へ出て行った。氷が逃げていったあとには、アサリがたくさんいる。町へ出たついでに、それを掘ってきた青年がみそ汁をこしらえた。

氷にとざされた港が開いたので、ケガニ漁も始まった。その一番漁を麻雀仲間の漁師に貰ったものが食卓に山積みされる。

どちらも早春、美味である。氷の下のアサリは、内臓に甘味があり、肉も硬くしまっている。ケガニは、四月に入ると脱皮を始め、ミソがすくなくなるし、肉が水っぽくなる。早春のものを味わったら、秋に再び実が入るまでケガニとはおさらばだ。

食卓には、まだ初物が乗っている。陽光にはじめて顔をさらしたフキノトウ。加えてギョウジャニンニク。これは北海道ではアイヌネギと呼ばれているが、春一番の白っぽい芽を掘ったものときたら、何物にも代え難い珍味である。

しかも、原野には量が多い。ひょっとすると、栽培している作物より多いのではないだろうか。アイヌネギだらけの沢はまわりにいくらでもある。

私はよく訊かれる。

「あなたは九州生まれでしょう？」

「そうですが」

「南の国で育ったのに、どうしてまた北海道などへ……」
「人がすくないし、自然と呼べるものが残っているし、土地が金と直接結びついていませんし、ね」
「そりゃあまあ、銀座と違うでしょうが」
「私がここに家を建てた時、玄関から内陸の方を見ます。夜、人家の明かりが一つも見えませんでした」
「はあ……」
「二年前に、隣へ漁師が家を建てました。電話一つで、先生、お宅の隣さ家建てさせてけれや、こうです」
「あなたの地所に？」
「そうですよ」
「それで？」
「ああ、どうぞ、ご自由に、と言いました。こっちだって、放牧地を囲った時、目見当でさくをこしらえたので、後で他人の土地をかなり囲っちまったのが判明しました。これは大変だ、やり直すのは手間だと考えこんでいたら、相手が言いました」
「何と？」
「ま、酒一升持ってきてけれや。それで、おらの土地さ使ったという印になるでや」
「おおらかなものだ」

「万事がその調子で、狭い所に閉じこもって生活しているという感じがしないわけですよ。これがまず、第一の理由」
「しかし不便でしょう」
「不便ねえ」
私は考えこむ。
確かに本屋は遠い。スーパーマーケットは近くにない。新聞だって、ここまでは配達されない。八キロ離れた町まで、毎日取りに行かねばならぬ。
しかし、そういったことが、住むのを困難だと感じさせるほど不便なことだろうか。
たとえばシバレが落ちると、書斎から母屋へ向かう林の中に、エゾコザクラが花をつけ、エンレイソウが咲き始める。
大地は日ごとに黒ずんできて、日が高くなると、その表面からもうもうと湯気が立ち昇るようになる。前の沢には、ミズバショウがぞっくり生える。北側の斜面の、まだ雪が残っているあたりには、ザゼンソウが咲いている。
大都会に住んでいて、そういったものを見に行こうと思ったら、大変な騒ぎになる。連休でも利用しなければ見に行けないので、長い列の後にくっついて、ハラハラしながら指定席を買い、何時間か列車に揺られなければならない。そしてまた、たとえ現地へ到着したとしても、そこはすでに観光地として有名になっていて、芋を洗うような混雑ぶりだ。展覧会でも見にいったかのように、人にサンドイッチされて景色を眺め、やがて疲れ果てて帰宅する。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com